

年間第八主日

ルカ 6・39-45

2019.3.2

高円寺教会 18:30 ミサ

クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

今日の福音書に出てくるおが屑と丸太は、共に視界を遮るものとして例えられています。人の目を遮るものというのは、権力欲だったり、富であったり、名声であったり、場合によっては知識、それから、人から聞いた思い込みのようなものであったりします。そういったものによって自分たちの目が遮られることがあります。人をつまづかせるものであれば、人の目を曇らせるこれらのものをおが屑や丸太と行っても差し支えがありません。ですから、人の目からおが屑と丸太を取り除くことは重要です。そういったものを取り除くと、やっとはっきりと見えるようになる。ただ、そういったことができる方はただ神様お一人であって、人間の力だけでは不可能だと思われます。

キリスト教を迫害したパウロという人は、ガマリエルという律法の専門家に学び、ユダヤ人としてエリートである彼は自分がとても正しく、他の人々に比べて世界を正しく眺めていると思ひ込み、キリスト教徒を迫害していました。けれども、復活したキリストに出会ったときにはっきりと分かったことは、自分が見えないということが分かった。目が見えなくなったと言われているけど、実際には自分の目が見えていないということに気付いた瞬間だったと思います。そして、3日間見えなかったのですが、神様から遣わされたアナニアという人に出会い、目からウロコのようなものが落ちて見えるようになりました。

それから今日の福音には目の見える人の特徴というのは、良い実を結ぶ木のようなものだと言われている。目が見えることと良い実を結ぶという2つの話は何の関わりもないように感じますが、福音書の著者であるルカは、関連したものと感じ、並べて書いたのではないかと思います。ですから、良く見えると思ひ込んでいたパウロは、人をけとばすような生き方をしていたけれども、自分が目が見えないことに気が付き、そして目が見えるようになったときに、初めて、神の命を生きることとは何かと考え始めた。彼は目が見えると思っていたときには、周りの命を滅ぼすようなことをしていた。でも、見えない自分に気がついて、見えるようにしてもらったときから、命へ至る道を歩み始めます。ですから、いくら自分がよく見えていると思っていたとしても、周りの人の人

生を暗くし、その命を踏みにじる人というのは、目が開いている人とはとても
言えません。

わたしたちはこのミサにおいて、永遠の命の糧をいただき、その命の糧を
30倍、60倍、100倍の実りとする命の木そのものになるようにと求めら
れています。出会う人々の人生を豊かにすることによって、わたしたちの目が
神様によって開かれ大切なものを見極める者へと変えられたことに感謝しなが
ら、今日も心を込めてこのミサを捧げましょう。